

[曲名] Berceuse Italienne

イタリア風子守唄

[曲種]

[作曲者] Carlo Munier

カルロ・ムニエル

[編曲者]

ムニエルはマンドリン音楽の父とも云われ詳細に書かなければならないが、合奏曲としての代表作「宝玉の舞曲」や「ネリー・アルバム」も順次紹介するつもりであるから作者に就いては其時に譲り此処では曲の解説に留める。

本曲はエドアルド・ベヴィラッカとジュゼッピーナ・ジョヴァネッティと云う若夫婦に贈られた子守唄で245番比較的後期の作品。

編成は第一、第二マンドリン、マンドラ、マンドロンチェロ、ギターであるが、カデンツァを配したり、

デュオ風な扱いがあり、マンドリン独奏曲としても鑑賞され得る。

運指も刻明指示され各パートの動きも独創的である。

最初と後半に現れるアンダンテ、ソステヌートがムニエルとしては、やや剛毅な感じが閃いているが、イ長調二拍子の子守唄は流石に優婉、且夢幻的である。

本曲は、1921年（大正10年）武井氏主宰シンフォニア・マンドリーニ・オーケストラ時代の第十二回演奏会ムニエル祭に上演された以外、余り上演されていない。

1969年10月31日発行

イタリアのマンドリンアンサンブル佳曲百曲集第一集より